

お支払いは、ヤリpayで♡
～セックスで支払いできる夢のようなサービス♡～

「お支払いは……？」

「おに一さんと『ヤリpay』で♡」

※

キャッシュレスが浸透して久しい現代。〇〇pay、△△payと様々な決済サービスが氾濫する中、突如として気が狂ったとしか思えないサービスがリリースされた。

それが『ヤリpay』だ。

仕組みは至ってシンプル。お金の代わりに注文した商品の代金分だけ、店員とセックスすることで決済が完了する。

サービスが世に出た当初、世間の反応は至極真っ当だった。「正気の沙汰ではない」「誰が使うんだ、こんなものの」と。

しかし、止まらない物価高と上がらない賃金、倫理観の

欠如により、このサービスはじわじわと普及していった。今や大手チェーン店ですら、レジ横には『ヤリpay加盟店です』というピンク色のステッカーが堂々と貼られている。

そして、僕が深夜バイトをしているこのファミレスも、例外ではなかった。

※

「……以上で、ご注文はお揃いでしょうか？」

「うん。ありがとう」

(……このお兄さん、さっきからめっちゃ食べるなあ。もう3回も追加注文してるし……)

伝票に刻まれた合計金額は、12,000円。注文対応をした客は、若い男がたった1人。僕、^{はやまいく}葉山育は密かに驚いていた。

テーブルの上には、ステーキ、パスタ、ピザ、山盛りのサイドメニュー、そしてジョッキのビール。どう考えても

深夜に1人で食べる量ではないが、お兄さんはそれらを驚くほど綺麗に食べ進めていた。

少しチャラそうだが、笑顔が爽やかで世渡り上手そうな雰囲気がある。正直に言えば……お兄さんはかなり僕の好みだった。

(イケメンお兄さん。ヤリpayで支払ってくれないかな……♡)

12,000円分。もしヤリpay決済なら、どれだけたっぷりセックスできるだろう。

(……でも、僕じゃ無理かあ)

期待した直後、僕は心の中で自嘲気味に息をつく。

ヤリpay最大のデメリット。それは、店員が客の好みでなければ使用されないことだ。

僕は男だし、見た目だってパツとしない地味なフリーター。この店にヤリpayが導入されてから、僕が『決済

先』に選ばれたことは一度だってない。

趣味のアナニーで僕のアナルは立派なおまんこに育っていて、いつでも受け入れOKだというのに。

「いけない、いけない。仕事に集中しなくちゃ」

切なさど、行き場のない期待にお尻の穴をキュンとひくつかせながら、僕は足早に持ち場へと戻った。

※

「ごちそうさまでした。お会計、お願いします」

「はい、伝票失礼します。……合計で12,000円になります」

しばらくして、お兄さんがお会計にやってきた。僕はいつものように、テンプレの台詞を吐き出す。

「お支払い方法はいかがいたしますか？」

「あー、そうですね……」

お兄さんは財布を出す代わりに、いたずらっぽく笑ってスマホの画面を僕に向けた。

「ヤリpayで」

「……えっ」

今、なんて言った……？

フリーズする僕の顔を覗き込むようにして、お兄さんはさらに甘く、とろけるような声で繰り返した。

「だから、おに一さんとヤリpayで♡」

提示された画面には、『ヤリpay』と書かれたピンクのロゴが踊っている。

(ウソ……！本当に？夢じゃない！？)

途端に、全身の血が沸騰したように身体が熱くなった。この最高にタイプなお兄さんと、今からセックスできるの……！？

「どうしたの？そんな発情した顔して」

みるみる赤く染まっていく僕の顔と、荒くなった吐息。
それを見逃さず、お兄さんはニヤついた笑みを深めてさらに追い打ちをかけてくる。

「ヤリpay、使えるの？使えないの？」

「はう……っ♡」

ヤバい。嬉しすぎて、お兄さんの視線だけでもうイきそう♡

「ヤリpayですね……！か、かしこまりましたぁ……っ♡」

僕は蕩けた声で返事をする、震える手でレジの決済開始ボタンを押し込んだ。

※

「はい、ごかいちょー♡」

「んんん……っ♡」

くばあ……♡ぬふ♡ぬふ♡ぬふ♡

今僕は、さっき知り合ったばかりのイケメンに、深夜のファミレスでオスまんこに指を突っ込まれてる♡

レジのモニターに表示された決済時間は1時間。

アナニーばかりでセックス経験のない僕には、それが長いのか短いのかわからなかった。けれど、この最高にイケメンなお兄さんの時間を1時間も独り占めできるなんて、幸せすぎてどうにかなりそう。

普段はお客様が順番を待つための硬めのソファーに、下半身丸出しで四つん這いになって犯されている。

「おに一さんのおまんこ、縦割れしちゃって超エロいじゃん。今までここに、何人のちんぽ啜え込んできたの？」

くば♡くば♡ぬふ♡ぬふ♡

逞しい指が、ピースサインをするように僕のアナルを容赦なく左右に割り開く。かと思えば、今度は指をカギ型に

折り曲げ、前立腺をゴリゴリと挟るように刺激してきた。

指だけで、もうイきそう。雑魚まんこでごめんなさい♡

「あアッ！！？？♡♡……んっ♡……ぜ、ゼロ…です♡」

「え、ゼロ！？マジで？」

「はい……ずっと、おっ♡アナニーが趣味で♡『ヤリpay』も、お客さんがはじめてなんれす……っ♡」

「てことは、俺がおにーさんの処女もらっちゃうんだ！……よーし、責任とってめちゃくちゃ気持ちよくしてあげる♡」

僕に向かって不敵にウインクをすると、イケメンお兄さんはボトムスを下着ごと脱ぎ出した。

バルンッッッッ……！！♡♡

「はう……っ♡」

現れたのは、その爽やかな顔立ちにはおよそ不釣り合いな、凶暴なまでの極太ペニスだった。怒張した血管が浮き

出し、カリ高な亀頭はまさに凶器。

毎晩僕を慰めてくれる自慢のオモチャたちが、かわいく見えるレベル。

（これが……僕をめちゃくちゃにしてくれるの？ ……嬉しい、嬉しすぎる……っ♡）

「おに一さんの名前教えてよ。俺はね、竜也。^{はなさきたつや}花咲竜也だよ」

ヤリpay用にレジ横に常備されている業務用ローション。それをたっぷり塗り込んだ雑魚アナルを、亀頭でちゅぱ♡ちゅぱ♡キスするように弄りながら、彼は名前を尋ねてきた。

「あ、んん……っ♡……いく、です……っ♡はやま、いく……っ♡」

「じゃあ、いくちゃんね！……っと、やっべ。時間もないから、さっさと『支払い』はじめるわ♡」

「え、待っ……！！！？？」

ぐぷぷぷ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ずっつぶ
ん！！！！！！♡♡♡♡♡

「ん おゝ おゝ おゝ おゝ おゝ おゝ おゝ おゝ おゝ
……………ツツツツツ！！！！？？？？♡♡♡♡」

ぴゅく、ぴゅるるる……！！♡♡

「ふは！挿れただけなのに、イっちゃたんだ？えっろ♡」

「はひ……っ♡あ……♡」

「今度はもうちょっとイくの我慢だよ♡」

パンっ！！♡♡パンっ！！♡♡パンっ！！♡♡パ
ンっ！！♡♡パンっ！！♡♡パンっ！！♡♡パンっ！！♡
♡パンっ！！♡♡

深夜の静まり返ったホールに、肉と肉が激しくぶつかり
合う卑猥な音が木霊する。

「はう、あゝ♡ おゝ♡ おゝ♡♡ ほおゝおっ♡♡ たつ
や、しゃの……おちんぼ、気持ちいい……っ♡」

「いくちゃんさあ……大人しそうな見た目して、ドスケベすぎ。一丁前にナカイキしやがって♡」

くりくり♡ぴんっ！！！！♡♡♡

「っ~~~~！！！！♡♡♡♡」

やばいやばいやばい！ 本物のちんぽ、気持ち良すぎ……っ！！こんなの、オモチャに戻れないよう♡

おまんこだけでもやばいのに、服越しに乳首コリコリ弄り回されて、脳みそトロトロ♡ナカイキ止まらない♡♡

「あ、またイぐ……っ、大きいの、キちゃう……っ！！♡」

絶頂に意識が真っ白に塗りつぶされそうになった、その時。

チーン……！！

「……すみませーん。お会計お願いします」

「っ！？！？」

ビクビクビク……ツツツツツ！！

突然のことに思わず竜也さんのおちんぽを強く締め上げてしまった。

「うおっ！？今、めっちゃ締まった♡」

聞き慣れたベルの音で、瞬時に自分の現状を思い出す。そうだ、僕は今バイト中なんだ。しかも、この時間のホール担当は僕しかいない。早くレジに行ってお会計しなきゃ。……でも、この状況で？

「すみませーん？ 誰かいらないの？」

「は、はひ……っ！少々お待ちください……っ♡あん♡」

大慌てで立ちあがろうとするけれど、ヤリpay決済の真っ最中で合体しているし、身体が震えて力が入らない。

「ふええ……ど、どうしよう……っ」

「いくちゃん、落ち着いて。俺が手伝ってあげるから……」

よっ、と♡」

ずろろろお……♡

「あ……」

一度、最奥まで埋まっていたちんぽがゆっくりと引き抜かれる。喪失感に震えたのも束の間、竜也さんはへ口へ口状態の僕の身体を軽々と抱え上げた。そして……。

ぐっっっっっちゅん♡♡♡♡♡♡

「んお”お”お”お”お”お”お”お”お”お” ～～～～
～ツツツツツツ！！！！？？？？♡♡♡♡」

背後から再び、猛々しいペニスを俺のナカへ突き立てる。宙に浮いた俺の体重がすべて結合部にのしかかり、最奥を無慈悲に虐め抜く。これってまさか……！

「やってみたかったんだよね～背面駅弁♡」

「ま、って……まさか……っ、お”お”お”お”お” ～～～～
～ッ！！！！♡♡♡♡」